私のフィールドワーク

現代中国学部教授　高　橋　五　郎

文字を書いた竹や木の札を、なめし皮の紐でとじた上古の書物……という厳かにして気品漂うものをお借りするには気が引けるが、筆者の専門であり趣味でもある海外フィールドワーク（国際社会調査）についてふれてみたい（なお、参考にならないと思うがついでに蛇足すれば、「国際社会調査」なる用語は他ならぬ私の造語である）。

宮本常一は日本全国をカメラ担いで隈なく歩き、一生を農山漁村調査で送った稀有の旅人である。宮本の足元には遠く及ばないが、筆者も、一応、北から南まで47都道府県を歩いた。これが今の中国調査や東南アジア調査に役立っている。中国は日本の24倍の国土面積をもち、多様な風土と自然が人びとの生活の基礎となっている。東南アジアもまた、南シナ海（海というよりも海洋湖といった方がふさわしい）を囲むように多くの国々が輪をなして連なっている。

日本はこれらに比べれば、面積も狭く、風土も均一で人びとの生活も単調なように見える。しかし、皆さんは経験があるだろうか。日本でも、地元民の通訳なしでは、会話によって意思疎通することができない場合があることを。私は新潟の田舎の生れで、言語は東北弁と変形した上方弁まじりの新潟弁で育った。子供の頃の10年ほど、村上市という鮭料理で有名なところで生活したが、此処は奇妙な言語を使うところで、普通の新潟弁とはまったく違っていた。したがって少々の方言には対応できる経験を自然に積んできたつもりだが、農村調査をするようになって、東北のある県の農家を訪れたときのこと、その家の主人の会話がまったく聞き取れず、私と会話できる地元民に通訳を頼んだ記憶がある。その調査会話はいまでもテープにとってあるが、日本語とは思えない難解さである。方言に限らず、この日本には実にさまざまな文化や生活、慣習や伝統があり驚くことが多い。

この体験は、日本でさえ、想像のつかない多様性をもつことが多いのだから、ましてや人種・民族と複雑な宗教事情、貧富の差や身分上の序列がいまなお幅をきかせている海外では、見たもの、聞いたものつまり調査したものを一般的と決めつけたり、安易に普遍化することはできない、といういましめを与えてくれることになった。

宮本は一生を日本の調査の旅に費やしたが、かれは普遍化できることはなにかを探しながら、結局行く先々では、そこにしかない特殊性を知る連続ではなかったか。そしてそれが、調査を続けるエネルギー源となったのではないかと思う。調査は多くの場合、初めての地で新しい発見をすることであるが、そのときの快感は経験者にしか分からないだろう。つまり、普遍性というのは一種の幻想であり、青い鳥に似ているということだ。青い鳥を発見しようと歩く毎日から、その目的を忘れさせるほどの面白さが積みあがっていく。これが調査であるまいか。

私の海外調査の場合も、こんなことをいつも心の片隅においている。そして調査の面白みがもっともよく実感できるときは、長いあいだ探していた資料が見つかったときである。また、探していた資料以上の、自分にとっては未知だった資料の存在とその実物に出会ったときである。資料探しは読みたい古書を探すことにも似ているが、決定的な違いは、古書には、リスト表やネット販売があって、必ずしも足で探し歩く必要はない。ところが、資料にはリストがない、ネット販売などあるわけがない。現地へ行くしかないのである。そして重要なこと、それは資料探しに現地の友人や知り合いの協力、伝手が欠かせないことだ。

ある資料を探していたときのことである。自分が探している資料を現地の知り合いと話していると、彼女は、「その資料なら、どこそこへ行ってみれば何か見つかるかもしれない」と助けてくれる。そして、1日をつぶすつもりで、事前にアポをとり、教えてもらったところへ行く。そこには確かに、参考になる資料、古い写真や新聞記事、関連する図書などはあった。しかし本命はない。とはいっても、せっかく来たのでさまざまな資料に当り、少しでも役に立ちそうな資料を漁る。その様子を見ているそこの人が、成果は上がったかと聞く。こちらは参考になったが、十分ではないなどと会話を交わし始めると、親切にも、「あなたが探しているものなら、ここへ行ってみなさい」などと、別の助言してくれるのだ。

このようにして、本当に探していた資料がやっとの思いで見つかることがある。ときに書写し、ときにコピーを許される場合もあるが、その日の夕方は満足感で一杯になる。が、これはうまくいったほうで多くの場合は、青い鳥探しに終わることが多い。それだからこそ、想いが遂げられたときの快感はまことに筆舌に尽くしがたいものになる。

「中国現地調査」厦門（アモイ）の訪問家庭で

しかし、いい資料に接しても持ち帰ることができないことも多い。中国の農村にはコンビニになどといったものはなく、村民委員会や古ぼけた看板が時代を語る信用合作社などで見つけた資料をコピーすることはできない。そこで、筆写となるが、はかどらない。このように、持ち帰ることができるのはほんの一部だけという場合もある。

次には、資料をどう読むか、という作業が待っている。私は、社会科学研究者にも勘や物語風に資料を読む力が必要だと思っているので、資料を読むときは、農民や華僑を主人公にして、資料が語る物語を想像することにしている。このやり方は勝手な決め付けや読み違いを招く危険性もあるが、学問とは、人間の物語を経済学的に語ったり、法学的に語ったりしているだけだと思っているので、物語に仕立てる方法は有効だと思う。これは私のやり方なので、否定したい方はどうぞ。

いまの私の課題は、集めた資料を物理的にどのように整理し、保存するかということである。例の「超整理法」云々、あれはいただけない。実践したことがない、素人の空想的整理法であり、実際には不可能なことが多い。そもそも、資料のだれもができる最良の整理法などない。資料整理の方法は、学問の仕方に関する個性を反映するものであって、これを否定した整理法は、厚さの順に書架に本を並べる図書館のようなものである。